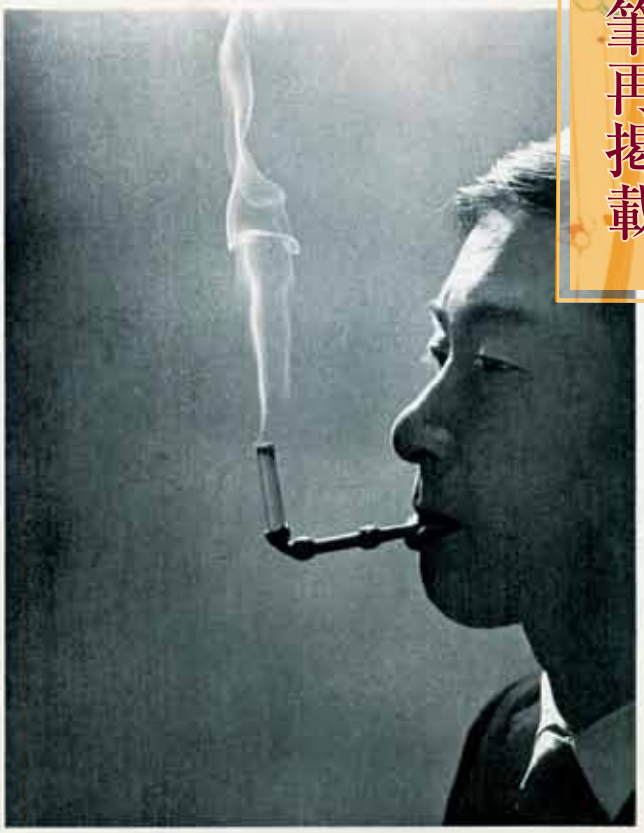
随筆再掲載



「タバコ」

星　新一

タバコを吸う習慣など身につけなければよかったと思う。少くとも益のないことはたしかなようだ。時どきやめようと決心をしかけるが、どうにもならない。

茶の間で子供と遊んだり、新聞を見たりする時にはなくても平気なのだが、原稿を書くため机にむかうと、つい手が伸びてしまう。アイデアが浮かばない時も、すぐ浮かんだ時も、タバコをくわえてしまうのだ。

私がタバコを吸いはじめたのは、旧制高校時代、昭和十八年ごろである。当時タバコは配給制度。だが、うちでは父が吸わないので、配給がたまる一方。そして、ほかにはなんの娯楽もない戦争中だ。くわえて火をつけてみたくなるのも当然だった。

そのうち、キザミが配給になることもあった。それを吸うためにキセルを買った。両端に真鍮の金具のついたやつである。若い学生が自宅でキセルをくわえ、思いついて真鍮部分をみがいて光らせたり、コヨリでヤニを取ったりする姿は、旗本退屈男の小型版のようである。だが、これが緊迫した戦局下の光景であった。ほかの者も大差なかったのではないだろうか。

日本のキザミというのは、タバコの葉が細く均一に揃えられ、世界に類のない芸術的なものなのだそうだ。やわらかい味で悪くない。キザミは害が少いとかで、転向しようかと考えているが、ヤニのそうじがやっかいである。物資豊富の時代となったのだから、使い捨てのキセルといった品でも出現してくれないものだろうか。

終戦直後にはオール真鍮製のシガレット・パイプが街にあふれた。タバコをむだなく吸おうという需要と、軍需工場の転換とがあいまった商品である。ネジ式の結合で、分解してそうじするのも簡単だった。なつかしい風俗である。いつのまにか姿を消したが、そのうち古道具屋をあさって入手し、保存しておこうと思っている。

大学は農芸化学科に通学した。化学分析の実験など随分した。いつか試薬をピペットで吸いあげている時、なにかのはずみでそれが口のなかに入ってしまった。たしか硫酸銅の溶液だったと思う。毒でもなく、飲みこんだわけでもなく、水で口をすすいだ。

そのあと、なにげなくタバコを吸ったのだが、口のなかになんともいえぬ甘い味がひろがった。口中に硫酸銅が残っており、それとタバコとの作用だったのだろう。

面白い現象と思い、研究すればサッカリンに匹的する新物質が発見できるかもしれぬ感じだったが、目先きの実験のほうがはるかに重要なので、ついそのままになってしまった。だが考えてみれば、タバコを原料に甘味剤を作っても、商品として引きあう可能性はない。よけいな寄り道をしなくて賢明だった。

やはり大学時代に「タバコをやめるには、硝酸銀の溶液でうがいをし、そのあとで吸ってみるといい」と友人が教えてくれた。どうなるのかとの好奇心があり、薬品も実験室にあった。やってみると、形容しがたいいやな味となるのだ。これを繰りかえしたら、タバコぎらいになるかもしれない。

こんな実験があるので、銀と銅とをくらべた場合、価格の点では銀に軍配があがるだろうが、味の点では銅のほうが私は好感を抱いている。こんな感想の主は、めったにいないにちがいない。

（SF作家）

五所車と桔梗と

佐々木 久子

近ごろは、どこへ行っても、ありとあらゆるモノがあふれていて、まさにモノの洪水である。

しかし、これほどにモノがあっても、ああステキだな……、というようなモノはすくない。

つまり本ものがすくないのである。いや、本ものとにせものとの差が縮まったのかもしれない。

消費者の方にも、本ものとにせものを見分ける力というものがなくなってきた。

ある高名な歌手は、ルビーとガラス玉との区別がつかないような人で、この人のもっている宝石は、ほとんど安ものばかりだときく。

子供の頃から唄いつづけて、スターになり装飾品のすべてを人まかせにしている。安ものやインチキなものを高く売りつけられても、まったくのメクラなのである。

私は宝石に興味のない女だから、ルビーだろうがエメラルドだろうが、猫に小判である。

が、いいものと悪いものとの区別くらいはつく……。

そうしたモノのよしあしを見抜く力は、いいものを沢山見ることによって養われるのだときいている。

そういう面でも、ほんとうにいいものがすくなくなってしまった。

インスタントなモノを食べ、アパートだのマンションだのという西洋風長屋に住みたがるようになると、モノのよしあしは二の次、三の次ということになるのだろうか。

ブヨブヨふくれ上った日本の経済成長は、人間の心もブヨブヨにしてしまい、すべてにタガがゆるんでしまった。

生きた花をいけることもしないで、ホコリにまみれた造花を家の中に飾っているような生活を私はイヤだと思う。

生花がたかければ、菊の三本でいいではないか。ほんとうの花をいけていたい。私はいつもそう思っている。

かくいう私も、狭い西洋長屋に住んでいるから、床の間というちゃんとしたところはないが、玄関には、結婚の引出ものに貰った銅製の小ぶりの壺をおいて、四季折々の花をいける。

隆・美代子とご夫婦の名がきざまれているこの銅製の花器は、もう十年も使いこんだもので、青黒いツヤがでて、私の心をなごませてくれる。

もう一つ、わが家には私の大好きな花器がある。これは京都の友人が友禅染のコンクールのようなもので第一等賞になり、その記念として贈ってくれたものである。

いかにも京都の人らしく五所車の花器なのだが、なにしろ青銅だから、重すぎて常に使うのにはかさばりすぎる。

この五所車の花器にお出ましねがうのは、正月か、祝いごとのやるときだけである。

つい先日も、内祝があって、この五所車に、桔梗、尾花、なでしこなどの秋の草花をいけてみたところ、王朝風な典雅な趣がでて、嬉しくてたまらなかった。

ガサガサした東京のど真中に住んでいても、自分の心のもち方一つで、生活にみずみずしい潤いをもたせることができるのだな……

と、心安らぐ一日でもあった。

心豊かに生きるためには、骨身を惜しまず心にハリをもたせるための工夫を、私たち一人一人が考えて生きなければいけないのだ、とも、この銅製の花器につぶやいてみる私でもあった。

（筆者「酒」編集長）

*文中に、現在では使用を自粛する表現がありますが、原文を尊重し、当時のまま掲載しております。